北の燐寸アート展は、北海道がかつてマッチの軸木、製函工場の街として知られていた歴史を現代に引き継ぎ発信企画したアート展です。

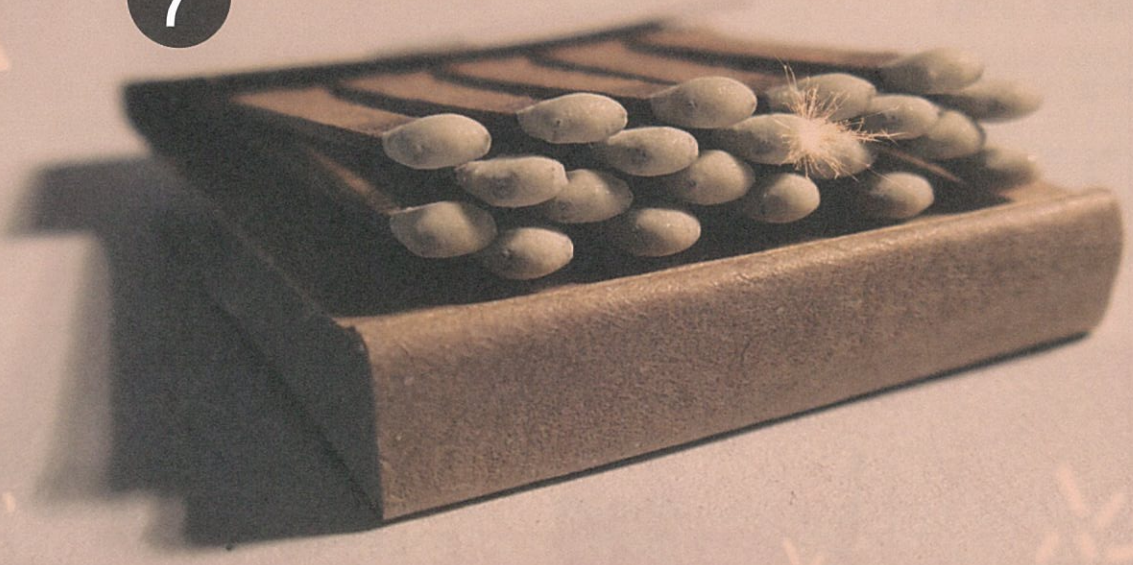
国産燐寸生誕百四十周年記念

北の燐寸アート展 7

・7月25日(土)－7月31日(金)
10:00-16:00
会場　ヒアラタアートスタジオ

・9月16日(水)－9月21日(月)
13:00-20:00(最終日は18時)
会場　ギャラリー犬養

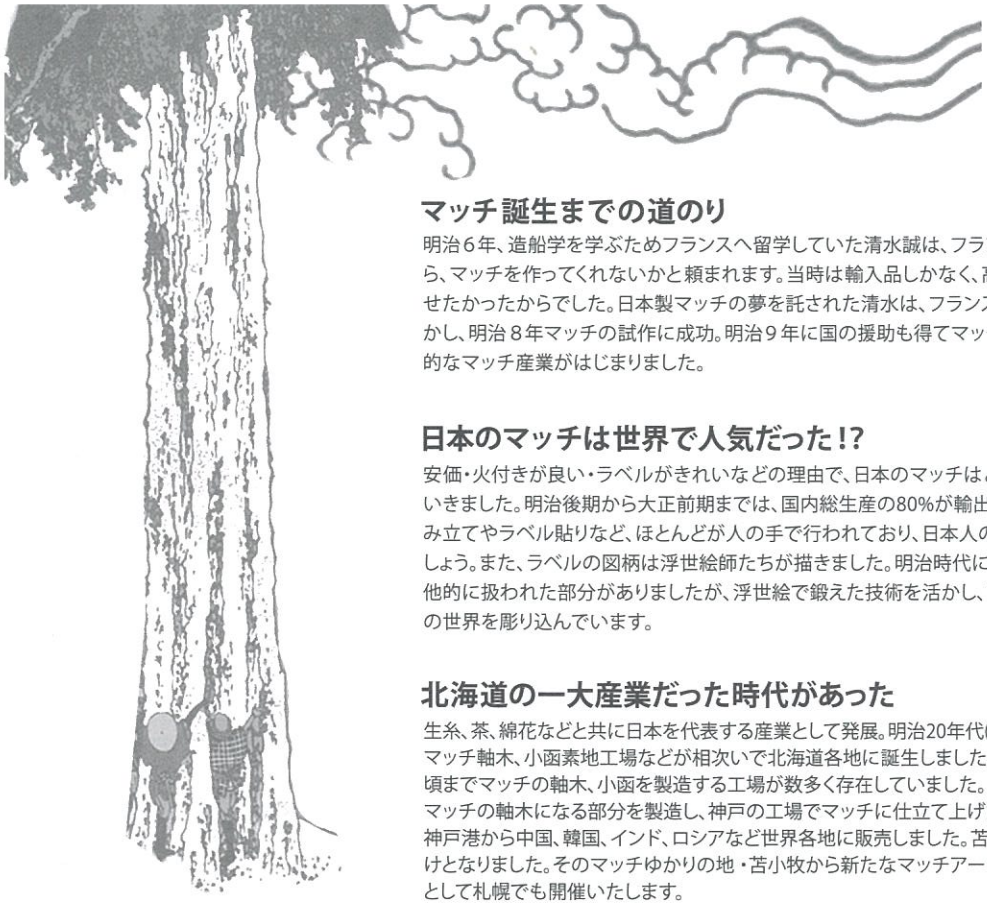
入場無料
展示作品は、非売品を除きお買い求めいただけます



お問い合わせ　北の燐寸アート展事務局　090-9754-7834(森)

主催：NPO法人ゆうべあまちづくりネットワーク、ヒアラタアートスタジオ　後援：苫小牧市、苫小牧市教育委員会、社団法人日本燐寸工業会
協力：苫小牧市美術博物館、メディアまちっくす

Design: Chihiro Naito



Match box ART

マッチ誕生までの道のり

明治６年、造船学を学ぶためフランスへ留学していた清水誠は、フランスに来ていた日本の政府高官から、マッチを作ってくれないかと頼まれます。当時は輸入品しかなく、高価なマッチを庶民にまで普及させたかったからでした。日本製マッチの夢を託された清水は、フランスで得た造船学と化学の知識を活かし、明治８年マッチの試作に成功。明治９年に国の援助も得てマッチ製造会社「新燧社（しんすいしゃ）」を設立。本格的なマッチ産業がはじまりました。

日本のマッチは世界で人気だった!?

安価・火付きが良い・ラベルがきれいなどの理由で、日本のマッチはどんどんと世界に市場を拡大していきました。明治後期から大正前期までは、国内総生産の80%が輸出されました。当時はマッチ箱の組み立てやラベル貼りなど、ほとんどが人の手で行われており、日本人の手先の器用さも評価されたのでしょう。また、ラベルの図柄は浮世絵師たちが描きました。明治時代になって西洋文化が取り入れられ排他的に扱われた部分がありましたが、浮世絵で鍛えた技術を活かし、マッチ原寸大の中に細かい図柄の世界を彫り込んでいます。

北海道の一大産業だった時代があった

生糸、茶、綿花などと共に日本を代表する産業として発展。明治20年代(1890年代)より、新しい産業としてマッチ軸木、小函素地工場などが相次いで北海道各地に誕生しました。苫小牧では、明治27年から40年頃までマッチの軸木、小函を製造する工場が数多く存在していました。エゾマツ、カラマツなどの木材からマッチの軸木になる部分を製造し、神戸の工場でマッチに仕立て上げたのち、生産の80%を輸出用として神戸港から中国、韓国、インド、ロシアなど世界各地に販売しました。苫小牧が工業都市へと結びつく先駆けとなりました。そのマッチゆかりの地・苫小牧から新たなマッチアートを発信しています。また、移動展として札幌でも開催いたします。

出展作家（62名）

阿地信美智、飴屋晶貴、磯優子、岩崎実穂、大石和美、大泉力也、大内香奈、太田千依、大友美香、小笠原実好
勝浦哲雄、加藤恵美子、加藤豊、川口巧海、菊地さくら、橘内美貴子、木下志保、久保田渚、栗林典子、Candle MOTHER
こだまみわこ、小林大、こんのあきひと、佐藤公毅、渋川勝正、白木里佳、菅原美穂子、鈴木耕榮、瀬川綺羅、田中詩乃
田中麻衣、谷口大、トントン工房ゆり介、内藤千尋、長崎晃子、中島知之、中田たかし、永谷未佳、仲田美紀、西澤恵子
ネモトサトコ、野村裕之、橋口潤平、林美奈子、祓川サヲリ、広瀬摩紀、平沼充安、星まゆみ、本田征爾、松浦進
松下由紀子、三浦恵美子、武藤幸代、森田かやの、森田諭、森本洋子、森れい、山口一子、山﨑千鶴、山田進・やまだ乃理子
やまもとゆか、吉永眞梨香

交流パーティー

各会場で交流パーティーを行います。
どなたでもお気軽にお越しください。
※お１人会費800円。
ギャラリー犬養は、別途1ドリンクオーダー。

・7/25(土)17:00-19:00
ヒアラタアートスタジオ

・9/19(土)18:00-20:00
ギャラリー犬養

苫小牧　ヒアラタアートスタジオ
会　場　苫小牧市日新町1-5-3

札　幌　ギャラリー犬養
会　場　札幌豊平区豊平3条1丁目1-12